原告団

遺族・CO裁判、災害責任追及、特集号

第二百二十四号

原告団レポート

CO患者——藤村幸生さん

S35年、警官隊と対峙するホッパーで、矢印が藤村さん。

マル炭時代

「姉ムコが三川鉱で働いていましてね。どうだ炭鉱に来てみんかと誘われたのですよ。マル炭にひかれての入社なんです」

藤村幸生さん（昭和四年十一月十五日生まれ）は昭和二十二年三月十五日、三川鉱坑内機械工として入社した。

この日はあいにくとCO特有の症状が出て、熊大で治療を受けてきたとのことで、気分のすぐれぬ体をおしての応対だった。

「熊本県上益城郡矢部町。通潤橋のある山村で生まれました。男三人、女二人の五人兄姉の中の三男坊でした」

昭和十九年、学校を卒業すると熊本市の健軍にある飛行機製作所に働きに出た。藤村さんは軍国主義にぬりつぶされた世相の中で、卒業してすぐに予科練に入りたかったが、父親が「兵隊にはいくな」と言ったので、仕方なく勤めたのだった。

しかし、思いは日に日につのるばかり。その年の十一月、愛知県岡崎市にある予科練に入った。

「終戦は横浜。防空壕の中に海軍の指令本部がありましてね。武装解除になったのですが、一部の兵隊が徹底抗戦で反乱をするということで、実弾をこめた銃を持たされました。銃をにぎったのはそれが初めて終わりでしたよ」

矢部町に帰って、しばらく働いていたが農地改革で田畑が少なくなり、いい仕事がないものかとさがしていた時、姉ムコから声をかけられたのだった。

機械工一筋

「入社した時は人間ばかりのようでした。チェーンコンベアをすえつけたり撤去したりする仕事ばかりでしたけど、戦後の解放感が職場にあって、みんなワイワイ言いながらやっていました」

昭和二十三年、房子さん（昭和二年十一月十二日生まれ）と結婚。

「あの時代は一軒の家に二世帯住んでいましてね。私たちも小浜南社宅の二階を借りていました」

長女のひとみさん（昭和二十四年十一月二十四日生まれ）はここで生まれた。

「昭和二十五年、荒尾市緑ケ丘若葉町十五棟に転居していらい住みついてます。もう新しく入社された人ばかりで、昔の人はほとんど引っ越してしまいました」

緑ケ丘社宅は荒尾市東部にあり戦後建設された。小笹の生い茂るなだらかな丘陵地帯を開いて、若葉町をはじめ十二町の社宅が、石炭増産の国策のためにつぎつぎに出来ていた。

現在はグリーンランドが出来たり、スーパーも進出して、社宅周辺は開発され郊外の住宅地となりつつある。その中で、空戸の多くなった夏草の繁る社宅が、昔の生気をなくして広がっている。

二女の美智子さん（昭和二十六年九月三十日生まれ）が生まれ、藤村さんは仕事に励んだ。

「三池闘争中は地域分会の文対部長をしていました。三川支部と闘争本部を往復で、家には下着を替えに帰るぐらいでした」

若葉町の分会長をはじめ、多くの役員が支部の任務につき、文体部長の藤村さんが代行しなければならなかった。

「オルグの受け入れ、動員、日の日も二十五昇部内でして、新労の人たちは残業していたのですが、私たち四人は定時に昇坑するため、ぬれた作業着を脱いで着替えていたら停電したんです。係員が坑外に電話しても通じないのです。この時、いやな予感がしましてね。何回かけても通じませんし、時間がきたので人車乗場へ歩いて出ることにしました。途中で、サァーッと白い煙に包まれ、マイトをうった後のように前後が見えなくなりました。しかたがありませんのでキャップランプをはずして、レールを照らして歩きました。しばらくいくと仲間たちが倒れていました。電気の高田分会長も倒れていました。私たちも思うように足が動かぬようになりはじめ、排気道に入りこみました。五目抜だったやがて藤村さんは傷害認定を受け、造成職場の万田作業所へ。

「雲が厚く下がってくる時、今にも雨が降りだそうとする時など頭がすぐれません。今日みたいに全身がだるく、まぶたのところがピクピクすると、胸がしめつけられるようになります。これは過労、睡眠不足が続くと起こるそうで、熊大の主治医の先生は死にはしないと言われるが、この苦しみはどうにもなりません」

房子さんは、「性格が変わりました。昔は怒るとすぐに品物を投げるなどの短気でしたが、COになってから、そういうことはありません。ひとつに熱中すると、とことんやるようになりました」

抗議の手紙

「長女のひとみが荒尾高校を卒業して、住友系の病院の看護学校に受験したのです。学科がすんで面接となり、災害のことを聞かれたそうです。会社が保安を守っていたら災害は起こらなかったと思います。と何度、聞かれても同じことを繰り返して言ったそうです。この学校に荒尾高校から四人受験していたそうですが、三池労組の子弟二人が不合格となりました」

「娘たちは、この学校に抗議の手紙を書いて送ったところ、折り返し手紙が来て、決してそのようなことではない。定員でしたので、という内容だったようです」

ひとみさんは長崎大の看護学校を卒業し、現在宗像市で養護教員をしている。

「父親の生活を見て育ってきていますから、あちらでも組合の活動をしているようです。夫婦共稼ぎで、子供三人育てていますから大変でしょうが、三池で育った根性ですからね」

「下の美智子も佐世保で夫婦とも職業安定所に勤め、子供二人を育てています」

連休の時など、車で藤村さんのところへ遊びに来るが、あまりにぎやかになると藤村さんの気分が悪くなる時があり、顔は見たいのだが、ままにならぬという。

事実の重み

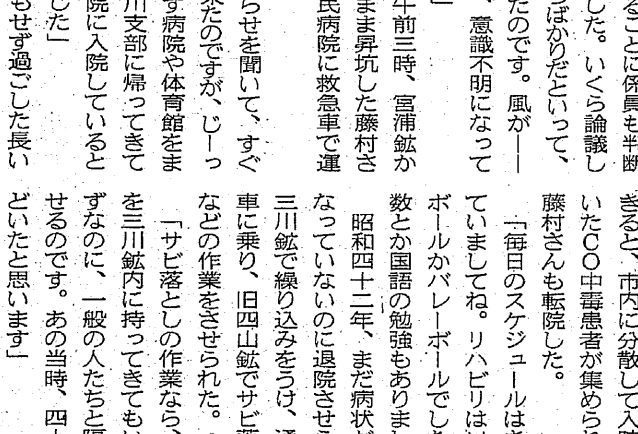
「私が一番腹が立ったのは、爆発の責任を三池労組になすりつけて、爆薬をしかけたという話を聞いた時です。機械工でしたから、時どき大斜坑を歩いて入昇坑する時がありましたが、炭じんは地下足袋が埋まるほど積もっていました。これは事実ですし、会社は責任をはっきりさせるべきです」

定年まであと半年、万田訓練所から役員に選出され、組合での会議出席は欠かさない。

「裁判も結審が間近になり、最後まで頑張り抜きたいですね」

バイクに乗るのは好きだが、車との離合を気にして肩がこるとのことで、奥さんの送り迎えである。夫婦ともどものたたかいは定年退職したあとでも続けると決意は固い。

×　×



気分がすぐれないという藤村さんだったが……。
夫婦そろって写真におさまってもらった。（4月20日）

会社は責任をとれ

夫婦ともどもたたかいつづける

意識不明で宮浦鉱から昇坑

S39年、荒尾市民病院に入院中の仲間たちと。この頃、奥さんたちも付き添っていた。左から3人目が藤村さん。

白煙の中を

「十一月九日のことですか。こと思いますが、袋坑道の中に係員数人と鉱員がいました。私たちも、その中に入りこみました。ここで風を短絡させることに係員も判断できずにいました。いくら論議しても時間が経つばかりだといって、斧でこじあけたのです。風が——と思った瞬間、意識不明になってしまいました」

十一月十日午前三時、宮浦鉱から意識不明のまま昇坑した藤村さんは、荒尾市民病院に救急車で運ばれた。

「災害の知らせを聞いて、すぐに三川支部に来たのですが、じーっとしておられず病院や体育館をまわり、また三川支部に帰ってきていたら市民病院に入院していると連絡がありました」

まんじりともせず過ごした長い夜の記憶を忘れることはできないと房子さんは言う。

翌年三月、大牟田労災病院ができると、市内に分散して入院していたCO中毒患者が集められた。藤村さんも転院した。

「毎日のスケジュールはきまっていましてね。リハビリはソフトボールかバレーボールでした。算数とか国語の勉強もありました」

昭和四十二年、まだ病状がよくなっていないのに退院させられ、三川鉱で繰り込みをうけ、通勤電車に乗り、旧四山鉱でサビ落としなどの作業をさせられた。

「サビ落としの作業なら、品物を三川鉱内に持ってきてもいいはずなのに、一般の人たちと隔離させるのです。あの当時、四十人ほどいたと思います」